



大分県書道

令和7年11月号 No. 425

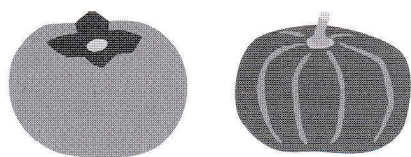
「シボナエル」

今、我家の台所にはたくさんの野菜が並んでいます。去年小さな畑が手に入り、始めた野菜作り。今まで興味もやったこともない野菜作りに挑戦。暫くすると、見かねた近所の人たちが入れ替わり立ち替わりやってきて、手取り足取り。おかげで無事に収穫できました。気をよくして今年も色んな野菜を植え付けました。今年の余りの暑さに生育を心配しましたが、元気に育ち、食べきれないほどの野菜が取れています。

そんなある日、一本の茄子を見た私「あつ、シボナエちよる」それを聞いた娘「何それ、聞いたこともない」何を言われたか分らない私「・・・」娘「シボナエちよるって何?きいたこともない。それ、方言?」私「何言よるんか。共通語に決まっちゃろうが」とは言ったものの多少の不安。スマホを取り出して調べてみると「シボナエル」とは「萎む^{しほ}」と「萎える^な」を合わせた言葉。大分方言と書いてある。信じられない。今まで一度も疑ったことのない「シボナエル」が、方言だって。でも、私にはその茄子の状態が「萎む」でも「萎える」でもないのです。それでは表現し切れていないように感じるのです。やっぱりこれは「シボナエル」だ。「シボナエル」を使おう。

ただし、その時もう一つ娘の言葉に違和感がありました。「聞いたことがない」?これはどういうことか。共通語だと思っていた私は、これまで普通に使っていたと思っていたのに。ふと気がつきました。今まで野菜の「シボナエてる」状態は何

理事 小野 尚
(無改)



度でも見ている。でも、興味のない私はそれをぼんやり眺めていただけではなかったのか。野菜に興味があった今、はつきりとそれを認識でき、言葉に出したのではないのだろうか。私はこれまで余り色んなことに興味を示してこなかったように思う。そんな私の脳こそが「シボナエ」ていたのだと気付いた瞬間でした。